常盤湖と石炭の歴史

～現在の宇部市へと発展させた常盤湖～

常盤湖とは？

山口県宇部市にある常盤湖は
周囲約5.0㎞、満水量約360万㎥を
誇る市域最大の人造湖(ため池)です

年表で見る常盤湖の歴史

・1698年(元禄11年)
かんがい用のため池として完成
周辺の新田開発が進む

・1929年(昭和４年)
大干ばつにより干上がる
湖底から採炭跡や飛び上がり地蔵が露出

・1943年(昭和18年)
厚東川から水を取り入れる用水路が完成

・現在
「常盤公園」として市民の憩いの場に
石炭記念館や植物園、動物園が隣接

常盤湖の本土手

本土手が造られたことで広大な常盤湖が
形成され、新田開発が進みました。
近代以降も農業用水だけではなく、工業用水
の供給や市民の水資源として長く
宇部市の発展を支えました



＠南駐車場近辺

飛び上がり地蔵の伝説

昭和4年の大干ばつの際、干上がった湖底から
お地蔵様の頭と体が別々に発見されました
それらを合体してお祀りしたのが
「飛び上がり地蔵尊」です



＠本土手近辺

ゆかりのスポットを訪ねよう

◆ときわ公園・石炭記念館
◆常盤湖本土手
◆飛び上がり地蔵尊
◆ときわ公園・周遊コース
　宇部炭田跡

江戸時代初期

石炭は生活を救う「代用品」だった

reason①：たまたま焚火に巻き込まれた

常盤湖周辺では地表近くに「黒い石(石炭)」が露出していました。農民や木こりが暖を取るために野外で焚火をした際、地表の黒い石に火が移り、木が燃え尽きた後もずっと燃え続けているのを発見しました。

reason②：山林の薪不足というピンチ

当時、人口が増えて木の数が減少してしまい、「薪」がとても不足していました。しかし、手軽に拾えて長持ちする「燃える石(石炭)」は、農民たちの生活を救う貴重な代用燃料となりました。





江戸時代中期

常盤湖が造られる

稲作が盛んな時代となった中、
常盤の地域周辺は台地で水が足りない乾いた土地だったため、谷をせき止めて大きなため池をつくり、田んぼを広げることがとても重要でした。
当時、地表近くで掘る「狸掘り」で石炭を採掘していましたが、採掘の際に地下水が湧き出ること、常盤湖が作られたことで、石炭の採掘は減少しました。

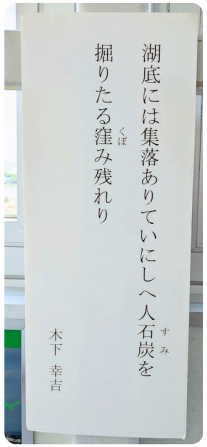
江戸時代後期

「南蛮（なんば）」の発明

糸引き車から着想を得て、人力排水機「南蛮」が発明された。それまで、6m～9mまでしか掘れませんでしたが、30mまで掘れるようになり、宇部炭田の開発に大きな影響をあたえました。

「南蛮音頭」

当時、石炭の採掘作業をするときに歌われていました。
今でも、多くの市民に愛されている曲です。



明治・昭和時代

湖を壊さず、地下から石炭を掘る

強力な排水ポンプや蒸気機関が登場すると、常盤湖の水を張ったまま、湖の周りから地下深くへ斜めに坑道を掘り進める技術が開発されました。



干上がった湖底から現れたタイムカプセル

1929年(昭和4年)
大日照りにより常盤湖が干上がった際、露出した湖底から、江戸時代の農民たちが掘った無数の炭鉱跡が現れました。水底に埋もれていた江戸時代の歴史があらわになった瞬間でした。

●双方が活かされた奇跡●
湖の力で農業を支え、その湖底の地下深くから石炭を掘り出すことで、宇部市は日本屈指の工業都市へと発展しました。このように、常盤湖の湖底から宇部市は発展していったのです。